

激変する大学入試の英語。中山先生が警告！

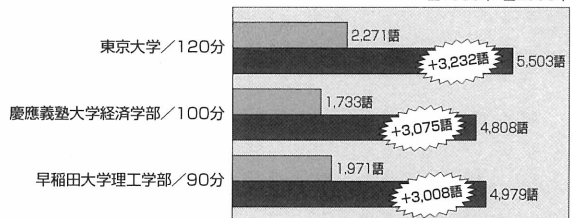
高速かつ正確に読む力こそ大切！

従来の“返り読み”は通用しない



お子さんの大学進学、さらには国際舞台での活躍を期待して、英語教育に関心のある保護者の方も少なくないのではないでしょうか。そうしたなか、グノーブル代表の中山伸幸先生は、「構文解析しながら英文を読むような従来型の勉強では、国際舞台での活躍はおろか、難関大学突破も期待できません」と警告します。どうしてでしょう。対応策も含めて話を聞きました。

入試英語において処理すべきワード数の変化



※1988年の東京大学についてはリスニングテストが行われた文系用試験をカウント。また、早稲田大学については旧・理工学部と、現在の基幹理工、創造理工、先進理工の3学部の試験（問題は共通）を比較している。
グノーブル 中山伸幸調べ

語順どおりに理解し、音読で頭になじませることが大切

上の図は、東京大学、慶應義塾大学経済学部、早稲田大学（基幹・創造・先進）理工学部の英語の入試問題について、処理すべきワード数を1988年と2008年とで比較したものです。それによると、3大学とも試験時間は同じであるのに、東大は2,271語から5,503語へと2.4倍、慶應は1,733語から4,808語へと2.8倍、早稲田は1,971語から4,979語へと2.5倍にも増えています。問題の内容にも大きな変化が見られます。かつてかなりの比重を占めていた文法問題や、単語や熟語を暗記していれば解けるような問題はほぼ姿を消し、A4で2枚程度の長文を読み、概要を理解したうえで設問に答える問題が中心になっています。

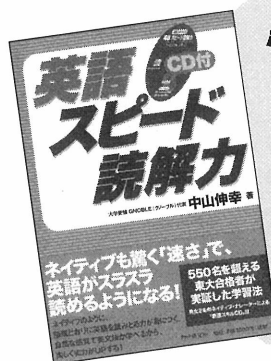
こうした状況について、長年、英語教育に携わってきた中山伸幸先生は、「大学も国際競争力が問われる時代。大学として英語の運用能力のない卒業生を送り出しているようでは、その存在意義も疑われかねません。そこで、一流といわれる大学は、入り口（入試）の段階から、“使えない受験英語”からの脱却を図ろうとしているのです」と話します。

これは極めて健全な傾向です。しかし、大きな問題があります。多くの中学・高校がそうした大学側の変化に対応できておらず、旧態依然とした語彙の暗記・文法理解中心の授業を行っているため、英語の勉強にかなりの時間を割いているにもかかわらず、入試で結果を出せない受験生が少なくないのです。象徴的なのが、構文解析しながら英文を読む、いわゆる“返り読み”です。“後ろから”訳し上げていく返り読みは、限られた時間内に長文の内容を把握する場合や、後戻りできないリスニングにはまったく適しません。中山先生は“返り読み”では、いくら訓練を積んでもスラスラ読めるようになりません」と警告します。

中山先生が早くから提唱し、グノーブルでも実践しているのは、「語順どおりに理解すること、理解している英文を「音読で頭になじませる」こと。この二つの土台を整えながら英文に親しむことが大切だと話します。

考えてみれば、それも当然です。世界には数千の言語があるともいわれていますが、すべての言語は“語順どおり”に相手に伝わっているはず。受け取り手は、相手が発信したとおりの順番で言葉をキャッチして、意味を理解するのが自然なのです。

大学進学においても、その後のキャリアアップにおいても重要な位置を占める英語。それだけに、中学選びや塾選びにおいては、そこでどんな英語教育がなされているのかも、無視できない要件のように思われます。



絶賛発売中!

- ★一読すれば英文のとらえ方が変わる。
- ★じっくり読めば、高速かつ正確に英語を処理する実力が付く。
- ★大学受験のみならず、TOEIC対策にも最適。

■ 大学受験 グノーブル代表 中山伸幸 著
■ PHP研究所 = 刊 ■ 定価 = 1,575円